

教育研究グループ「研究結果」報告書

報告日 令和2年3月31日

グループ名	多摩社会科勉強会	フリガナ 代表者氏名	タカガキ マミ 高岡 麻美
学校名 (代表者)	府中市立府中第三中学校	電話番号	042-361-9303
研究テーマ	「深い学びを実現する思考力・判断力を育てる社会科指導の工夫」		
研究期間	令和元年7月1日 から 令和2年3月31日 まで		
研究結果 の概要	<p>指導案やワークシート、定期考査問題を基に実践報告をし、研究協議において、意見交換をすることにより、「明日の授業」に生かす、より実践的な指導法工夫に結びつけることができた。「深い学び」を実践するため、日常の授業において、「単元を貫く課題」や「単元構想図」の作成に取り組む若手教員が増えてきた。そのため、教材研究にも深みが出てきており、協議も活発になってきた。また、各地区での研究授業も積極的に受けており、それぞれの地区での社会科指導発展につながっている。</p> <p>また、毎回、東京学芸大学講師を顧問の先生とし、指導を仰いでおり、より専門的なアドバイスをいただくことできている。都中社研研究部員をはじめ、指導教諭等から、毎回「発表報告」「先行事例」を発表してもらうことにより、若手教員へ広い視野で教材研究をする指導の場となっている。さらに、東京都中学校社会科教育研究会と連携を図った。</p> <p>今後は、新学習指導要領の主旨を踏まえ、高等学校の授業実践も紹介していく。</p>		
※詳細は別紙により報告	<p>(1) 年2回研究協議会を実施した。</p> <p>(2) 日々の授業実践を積み重ねた結果を研究協議会で一人一人発表し、協議を重ね、自分の指導法を振り返る機会とした。</p> <p>(3) 特に「単元を貫く課題」について、年間を通して、研究協議を重ねた。第3回の研究会では、「単元を貫く課題」について、グループワークをし、新学習指導要領を踏まえた新しい単元構成の提案を行った。</p> <p>(4) 3年間を見通した指導計画を意識し、見方・考え方を働かせ、目標を明確にした地歴融合の授業や、公民的分野を念頭にした単元指導計画の検討ができた。</p> <p>(5) 特に多摩地域の若手教員育成のため、東京都中学校社会科教育研究会と連携を図り、夏季研修会、示範授業等へ参加した。また、東京都研究員研究発表会等へも参加した。さらに、毎回、東京都中学校社会科教育研究会の研究部委員を招聘し、実践報告を行い、先進的な指導方法を学んだ。</p>		
その他 特記事項			

「深い学びを実現する思考力・判断力を育てる社会科指導の工夫」

【研究の内容】

第1回 8月24日(土)

(1) 定期考査問題を持ち寄り、協議した。協議の中で、以下の提案、まとめがされた。

- ・記述問題について
 - 「次の4つの語句を使って書きなさい」「20文字で答えなさい」のように、字数制限をすると、解答率が上がる。
 - 都立入試の問題文を真似て問題文を作成してみるのも一つの方法。
 - 1年の最初のテストから、記述問題は、必ず入れていく。慣れさせるのは、大切である。
- ・技能を問う問題について
 - 他社の資料やインターネット検索を使うことで、絵画資料などは見つけやすい。
- ・思考を問う問題について
 - 「技能」(読み取り)と「思考」の問題は、分けきれないところがあるかもしれない。情報をとってくるのが「技能」で、それを基に考えるのが「思考」。
 - 2つの資料を関連付けて考えさせると、「思考・表現」の問題となる。
 - 「この資料をもとに、理由を考えなさい」というのは、「思考」問題ではないか。

(2) 発表報告として、「夏季休業中の課題」等について紹介があり、協議した。

①「家族に昔の話を聞く」(戦争の話を聞いてくる)

→歴史+公民の授業でも活用できるのではないか。

②休み明けテストとして

- ・「用語テスト」「年表テスト」の実施：夏季休業前にリストを渡し、覚えてくる。
- ・「用語について説明させるテスト」：単なる暗記にさせないための工夫

(3) 先進事例として、以下について紹介があり、協議した。

板橋区教科等指導専門官(中学校社会科)第1回公開授業から

「『空間的相互依存作用』の視点から、オセアニア州の地域的特色を理解させる授業」

- ・単元を貫く課題として「持続可能なオセアニア州にしていくためには、どのような結びつきが必要か」とし、まとめはパフォーマンス課題とした。
 - ・パフォーマンス課題を「どのような『結びつき』を活かしてどのようにしていくか」の提案型としている。
 - ・資料は、オーストラリア大使館のHPにデータベースがある。
- レポートを全部埋めるなど、書かせることが大切である。
- 書けない生徒への支援、評価をどのようにしていくかは、引き続きの課題である。

(4) 講師の先生から出された題材「南アメリカ州の単元を貫く課題」について、全員で協議した。

①「単元を貫く課題」について

- ・「森林伐採と環境問題について考える」
- ・「フィッシュボーンは、なぜ起きたのか。どのような影響があるか」
- ・「アマゾンの火災」の写真を見せる。また都市の発展の写真を見せる。「経済発展と環境問題を両立させるには？」
- ・「どうしてブラジルには、日系人がいるのだろうか」

<講師の先生から>

- 相反するものを見せて、「なぜだろう」「どうしてこのようなことがおきるのだろう」と生徒に思わせることが大切である。
- 日常生活にはないものを見せて、疑問をもたせることは大切である。
- 追究意欲を継続させる課題を導入に使うことで、思考を毎時間継続させることができる。
- 毎時間習得したものが、活用される課題が良い。
- 「深い学び」にしていくには、「単元を貫く課題」を設定し、追究して自分なりの答えを導く出すことが重要である。
- 「なぜ」と疑問形がよいのか、「どれを選択するか、どのように解決をするべきか」という課題解決型がよいのか。
- 思考を深めさせるには、立場の違う人たちの根拠となる資料を示し、多面的多角的に考察させることが大切である。

②講師の先生より、「主体的に取り組む態度をどのように評価するか」について指導があった。

- ・「主体的に取り組む態度」とは、「粘り強く取り組む態度」と「学習を調整しようとする態度」の両面である。
- ・「学習を調整しようとする態度」について、「見方・考え方」が深まったかが大切である。
- ・「学習を調整しようとする態度」は、「工夫・改善する力」である。
- ・1つの単元でみとるのではなく、1つの学期の中でみとっていくことが、求められている。

第2回 12月21日(土)

(1) 各自の研究授業の指導案を持ち寄り、協議を進めた。協議の中で、以下のことがまとめられた。

①資料の読み取りについて

- ・雨温図の読み取りは、1年地理の最初でしっかりとやらせる。
- ・個人でも、グループ活動の中でも、読み取ったことを気付きで終わらせないために、根拠をもって話をさせることが大切である。そのことにより、既習事項や経験と結びつき、知識の活用につながる。

②思考ツールの活用について

「ベン図」「くまでチャート」「フィッシュボーン」等

- ・思考を可視化、構造化していくのに有効な手だてである。
- ・話し合い活動で、様々な意見を共有し、個人の考えをまとめるのに役に立つ。

<留意点として>

- ・目的をはっきりさせる。生徒は積極的に活動するが、目的をはっきりさせないと、活動ありきの授業になってしまう。
- ・大事な用語を入れさせる。図にまとめた場合、要素が抜け落ちる危険性がある。
- ・ゴールを明確にもたせる。

③ジグソー学習について

<方法>

- ①自分が1つの立場にたち、考え、グループ(エキスパート班)で考えを広める。
- ②様々な立場をもつ生徒同士で、1つのグループ(ジグソー班)を構成し、自分の立場の主張をするとともに、他の立場の主張を聞き、考えを深める。
- ③自分のグループ(エキスパート班)に戻り、考えを共有するか、今までの主張から学んだことをもとに、個人の考えをまとめる。

<留意点>

- ・単元のまとめで使う活動。
- ・様々な立場が、多面的・多角的な考えになるかどうか、吟味する。
- ・生徒にとって、身近な存在となる立場が設定できると良い。

例) 関東地方のまとめで想定した様々な立場(中核的事象:人口)

- ・地方出身の東京在住の大学生
- ・千葉ベッドタウンの子育て家族(父は東京勤務、母はショッピングモール勤務)
- ・ニュータウン在住の一人暮らし老人
- ・群馬在住の日系ブラジル人
- ・近郊農業を営む夫婦

④単元構想図について

- ・単元を貫く課題設定をし、毎時間の学びを積み重ねていくには、教師自身が単元構想図を作成すると大変効果的である。

例) 関東地方のまとめ (中核的事象: 人口)

単元を貫く課題「首都機能は移転すべきか？」

→「○○すべき」という「構想」に至る価値判断できる課題

毎時間の課題

第1時「なぜ○中から富士山が見えるのか」

第2時「なぜ銀座の地価は4000万円もするのか」

第3時「東京大都市圏はどのように広がったのか」

第4時「漁獲量の少ない東京になぜ築地市場ができたのか」

第5時「東京の臨海部にはなぜ高層住宅が増加しているのか」

→「なぜ」「どのように」という「考察」に至る課題設定

第1時から第5時までの知識をまとめて、第6, 7時で「単元を貫く課題」について、

取り組む

⑤思考を伸ばす授業の評価方法について

- ・1単位時間の中で、1つの観点の評価が良いのではないかな。
- ・資料を読み取る明けは「知識・技能」の観点。知識を結び付けて考えるのは「思考・判断」の観点

⑥公民的分野「対立と合意」の考えを活用した人権の授業の工夫について

- ・意見が異なる主張に対して、さらに生徒の考えを揺り動かす教師の働きかけが必要
- ・最後は「それぞれの主張には根拠がある。対立が起きても、0か100ではない」というまとめをする必要がある。
- ・対立したが、合意に至った事例を紹介し、「本当はどうしたら良かったか」と改めて考えさせるのも1つの方法。
- ・国民として、今の世の中が正しいのかという主人公意識をもたせることが大切。これが社会参画につながる。

(2) 先進事例として、以下について紹介があり、協議した。

(i) 「学びに向かう力・主体性」について一身近な地域調査の授業から－

- ① 「単元を通して考える課題」を設定する。
- ② 毎時間、授業の終わりに学習内容の振り返りをさせる。
- ③ 毎時間、授業の最初に、地図記号の小テストを実施し。単元の終わりは地図記号コンテストを行う。
- ④ 住んでいる地域の地形図を活用する。
- ⑤ 単元の最後に、「単元を通して考える課題」について考えさせ、「学びに向かう力」を評価する。

<協議から>

- ★ 「学びに向かう力」の評価は、ポートフォリオ形式が有効ではないか。「学びを見直す力」と考えても良いのではないか。
 - ・ 毎時間教師が評価を返すことで、生徒は意欲的に授業に取り組むことができるようになる。ただし、時間と手間がかかる。
→点数をつけるだけが評価ではないのではないか。
 - ・ 「単元を通しての課題」設定や「毎時間の課題」設定が今後の課題である。
 - ・ 生徒は、単元の最初の目標が「地形図が読めるようになる」であったが、「比較して読める」に変容していった。このことは「学びに向かう力」の向上ではないか。
- ★ 「学びに向かう力」・「発見したことを書きなさい」ではなく、「これからの学習（社会）に活かそうと思うことを書きなさい」の方が単元の終わりの問いとしてふさわしいのではないか。

例) A 評価を考えられるワークシートの記述

「等高線や地図記号を見て、その地域の特徴をすぐに想像できるようになりたい」

「他の地域の地形図を見た時、どこが違うか比べられるようになりたい」

B 評価を考えられるワークシートの記述

「地図を読んだりするのに活用したい」

- ★ 毎回の課題設定には、積みあがっていく課題設定が良い。生徒も力が積みあがっていく実感があるだろうし、教師の力も積みあがっていくはずである。
- ★ 「学びに向かう力」の要素のうち、「粘り強くやろうとする力」の評価をどうしていくか。
→単元の後半になればなるほど、伸びていく力。「なぜ自分はB評価なのか」と聞いてきた生徒は伸びると考えられる。
→個に応じて声掛けをすると有効と考えられる。
- ★ あきらめずにチャレンジしているが、教員が目指す目標には達しない生徒の評価をどうしたら、良いか。
→個人内評価で評価すると良い。

(ii) 「リーディングスキル」について

「リーディングスキル」とは、汎用的な基礎的読解力のこと。読み解く力と想像力が必要である。文脈を大切にするのは、人間しかできない力。

- ①情報を収集する。
- ②読み取る
- ③関連付ける
- ④読み解きながら、思考する。(推論)
- ⑤汎用化された知識として一般化される

★「リーディングスキル」を向上させる授業改善とは

例)「地方の有力者による領地支配が強まった理由を自分の言葉で説明しなさい」

「武士がどのように登場してきたかを自分の言葉で書きなさい」

(3) 発表報告として、以下の実践報告がされた。

「全国中学校社会科教育研究会徳島大会」「関東ブロック中学校社会科教育研究会千葉大会」の参加者より、報告がされた。

(4) 講師の先生より、以下についてご指導いただいた。

①新しい評価について

- ・1年間のスパンの中で、みとっていくことが大切。
- ・3つの観点については、単元の中でそれぞれ選択してみとり、学期全体で3つの観点による評価ができるようになれば良いのではないか。評価のための評価にならないようにする工夫が必要。
- ・良い例(A評価)を示して、説明してあげるのも1つの方法ではないか。
- ・生徒が3年間学んだ後、自分のポートフォリオを見て、自己評価できるようになっているのが良い。生徒自身も自分の成長を実感できる。

②単元を貫く課題について

- ・「内容のまとめり」を意識することが大切。
- ・年間指導計画の中で軽重をつける勇気も必要である。

第3回 3月20日(金)

各自の研究授業の指導案を持ち寄り、協議を進める予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、中止とした。

発表予定だった指導案は、以下の通りである。

「身近な地域調査」で水害に焦点化した授業実践

総合的な学習の時間の防災学習と併せて、外部講師を導入に活用した。また「水害が予想される地域なのに、なぜ人口が増加しているのか」を主題設定とし、人口増加の要因を「魅力」、水害への対応を「課題」として授業を構成した。

「消費者教育」として、SDGsに結び付けた授業実践

行政書士の先生を外部講師に招き、ボトルラベルから「自立した消費者」について考えさせた。社会科としての消費者教育を行うため、「対立と合意」の考え方をを用いて、企業と消費者、また行政の立場から、よりよい社会の在り方について、グループ協議を行った。最後は、SDGsの「作る責任、使う責任」に結び付けた。

【成果と課題】

(1) 成果

- ①指導案やワークシート、定期考査問題を基に実践報告をし、研究協議において、意見交換をすることにより、「明日の授業」に生かす、より実践的な指導法工夫に結びつけることができた。
- ②「深い学び」を実践するため、日常の授業において、「単元を貫く課題」や「単元構想図」の作成に取り組む若手教員が増えてきた。そのため、教材研究にも深みが出てきており、協議も活発になってきた。また、各地区での研究授業も積極的に受けており、それぞれの地区での社会科指導発展につながっている。
- ③毎回、研究開発委員や各種学会等での発表等の先行事例を複数発表してもらい、それを基とした協議を行っている。そのため、会員の新学習指導要領への理解が進んでおり、新しい評価についても関心が高い。
- ③都中社研研究部員をはじめ、指導教諭、参加した校長、顧問の先生に毎回、複数参加していただくことにより、より専門的なアドバイスをいただくことができています。また、今後の社会科教育の方向性を知る機会となっている。
- ④都中社研の事業のほか、各種の研修会を紹介することにより、多摩地区の若手教員の研修意欲を高めることができた。

(2) 課題

- ①新学習指導要領では、小中高のつながりが重視されている。そのため、中学校の実践事例だけでなく、高等学校の授業実践も紹介していく必要がある。
- ②「聞く」だけでなく、「参加する」ことが何より大切である。そのため、共通の課題を提示し、その場で協議し、指導案を作成するなどの工夫も図る必要がある。